

## 祝 100 回 生き甲斐と豊かさに乾杯

長原 慶子  
(川崎市 元保健所課長)

片マヒ自立研究会 100 回記念、おめでとうございます。

川崎市で保健所の係長だった私が、森山さんを知ったのは昭和 63 年の暮れのことでした。障害者の自主活動をしていたグループが、その歩みをつづって文集を作りたいというときに、知人を通じて森山さんがワープロの手伝いを申し出てくれたのです。

そして私は、お礼のために横浜に出向いたのが、二人をつなぐ長いお付き合いの始まりでした。

平成 3 年には田島保健所の課長時代に、大田先生に来ていただきましたが、その時には森山さんは『歩けた！ 手が動いた』のゲラ摺りを先生にお渡ししていました。森山さんの話では、先生はそのゲラを読まれて、大変よろこばれて「歩けた！ 手が動いた、その前に心が動いた」と書評を下さって、森山さんは「お面っ！と正面から打ち込まれた思いだった」そうです。

9 月に本が出版され、横浜でも友人が集まり出版を祝いましたが、私はオーストラリアの視察出張から帰国したばかりで出席できないと思っていましたら、「出張報告の文献翻訳は手伝うから出席してくれ」と、「イラワラ女性健康センターの年次報告書」を 3 人の障害者で翻訳してくれました。

その時に「雪に覆われている能力」が残されていることを知り、片マヒ自立研究会を作るきっかけになったと聞きました。

私の大切な資料綴りの中に、森山さんが平成 7 年 12 月にまとめられた「自立研究会の概要」がありました。

片マヒ自立研究会は、平成 3 年 12 月 12 日、川崎市立中小企業会館の会議室で「心のリハビリ」というテーマで始まったとされて

いるのを見て、大変驚きました。

このときは森山さんから「どこかに部屋を取って欲しい」と頼まれて、私が会員になっていた会館の予約を取ったからです。

それ以来、14 年余月、この 9 月で 100 回を迎えたこと、本当におめでとうございます。

「継続は力なり」といわれますが、それを支えてきた源泉は何だったのでしょうか。リハビリは子育ての真髄と同じで、「手をかけて、声かけて、目をかける」、「這えば立て、立てば歩めの親心」と、良く似ていると、何時もそう思っています。

片マヒ自立研究会に参加された方々が主人公で、「われ以外は皆師」という謙虚さが、それぞれの個性の尊重と、持てる知恵と体験を生かし、交流し励ましあいながら高い目標を見つけ、ともに進んで来たことが、100 回を迎える原動力となったのでしょね。

また、会員の皆様のご自分の障害を受容しつつ、克明な体験記録を本にまとめ、新しい価値の創造にまでたどり着かれた努力に、「凄いなあ」と感激しております。

創元社出版の『脳卒中後の生活－元気が出る暮らしのヒント』の本を、森山さんから贈っていただき、同病の先輩から後輩へ「元気が出る座談会」障害を抱えどう生きていくかを読み、14 年余月、100 回を迎える片マヒ自立研究会の姿が美しく輝いて見えました。

横浜市を発信地として、全国の友へ愛情と友情を送り続けているのだと、痛感いたしました。豊かな片マヒ自立研究会の活動とそれを支えている皆様に乾杯！